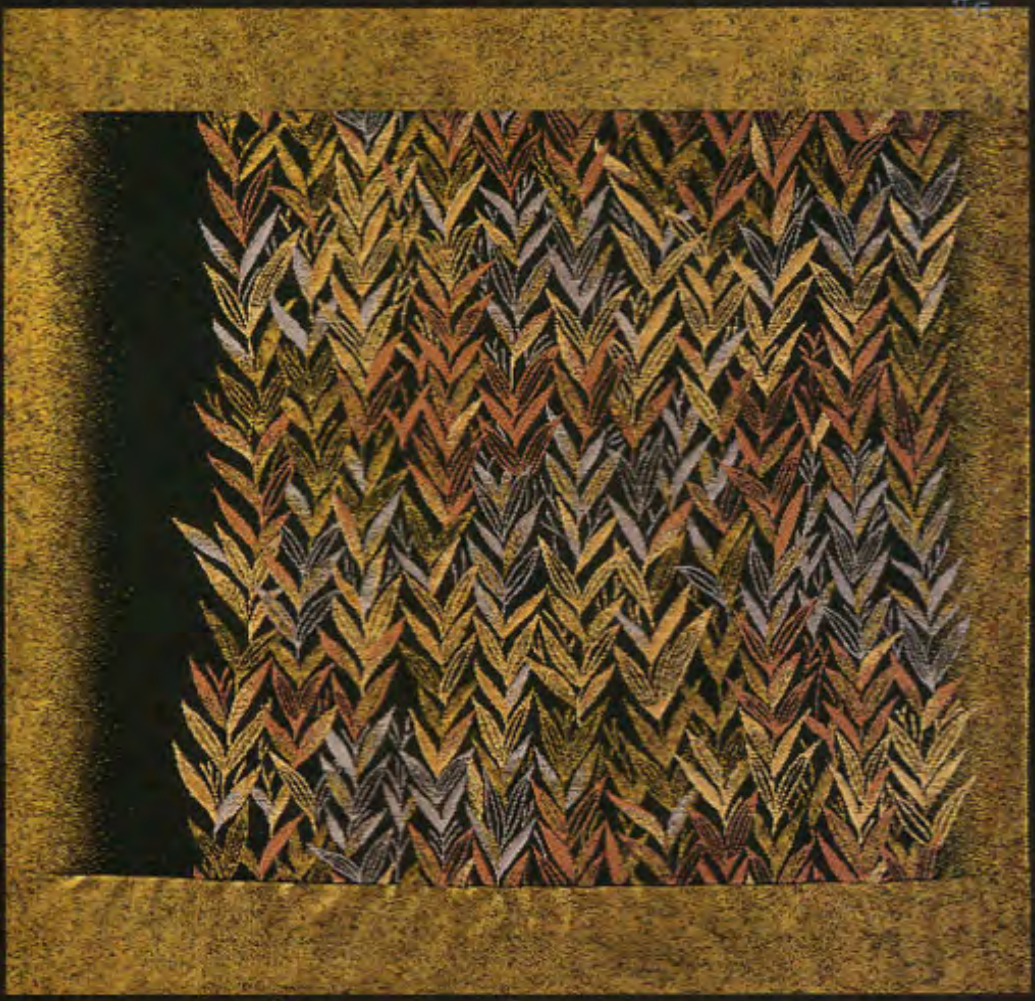
京鹿子

平成二十九年十一月一日発行
通巻一一一九号（毎月一回一日発行）



11月号

―近詠―

鈴鹿呂仁 拾掬集 その二十六

ぶだう一房ふるさとを裏返す

青空をいちまい剥がす葡萄狩り

葛咲いで時ゆるやかに国栖の里

新涼の風が操る赤信号

道行きの二人の定め萩の蝶

紅絹裏に風の零るる萩の宮

PDF= 俳誌の salon

連判の口裏合はせ螻蛄鳴かす

鬼の子の良い子ぶるのは表向き

流刑地へ航跡白し秋落暉

秋蝶の二頭の黙や流人の地

山顚を鎮め二龍の海うらら

霜降の傾れ落ちたる九十九坂

鵙猛る腰かけ石に恋みくじ

朽ち楠の精なる宿り秋のこゑ

PDF= 俳誌の salon

―近詠―

鈴鹿　仁

龍田姫

龍田姫橋の真ん中濡れてゐし

龍田姫一陣の風ふと優し

萩まつり

嫋やかに人招き入る萩の露

萩ゆらす風の意となる神の技

風誘ふ梨木さんの萩の径

PDF= 俳誌の salon

―近詠―

和田　照海

溽暑

洛中はどこを切つても溽暑かな

水切りのみづ閃閃と瀬田の秋

鞍馬寺の昼を灯して峰しぐれ

かなかなや背戸とは泪するところ

追伸のにじみはじめて蚯蚓鳴く

PDF= 俳誌の salon

英華採集

地図読めず取説読めず海月浮く

京都　相模温子

海月という生物は愛される生き物であろうか？多くの人が「否」と答えるであろう。海水浴で賑わう海では、時折悪戯をして嫌がられる海月も好き好んで人間に近づいて来るわけでもないが、海月にして見れば「地図読めず」である。「取説読めず」は、回遊の仕様書であろうか？海のナビと捉えれば面白い。「読めず」の否定形のリフレインが、実に効果的であると言える。

雨蛙半眼で診る浮世かな

堺　寺岡直美

雨蛙は、微動だにせず何を見ているのだろうと思う時がある。よく見れば半眼である。何を警戒するでなく微睡んでいるのかも知れないが、作者はそれを浮世を見ていると捉えた。それも混沌とした人間社会の裏側を覗いているのであろう。「見る」ではなく「診る」という漢字を当てたことが実に面白い。果して雨蛙はどんな判断を下したのだろうか？

守宮鳴くことは問ひとも応へとも

福山　横溝和恵

「亀鳴く」という季語があるが、本来鳴かないものを鳴かせて諧謔的に句意を広げることがある。しかし、どうも守宮は鳴くようである。基本的に動物等が鳴くのは、その存在を知らしめるという目的の伝達手段として使われることが多いが、守宮のそれは何故だか解らない。その不思議さを逆手にとり守宮が鳴くのは、人間に対して現世の不条理を問いかけていて、その不条理に対して人間社会の有るべき姿の応えを出しているのかも知れない。

PDF= 俳誌の salon

近詠

松本　鷹根

秋ともし

溝蕎麦や田水を余す奥嵯峨路

新涼の苔の浄土や祇王祇女

竿出して湖の素秋に前屈み

妻すでに厨灯せり秋簾

秋ともし詠人知らずの恋の和歌（うた）

塩貝　朱千

星月夜

つまべにの咲けば小さき物語

風に咲く風のかたちの大白蓮

桔梗一りん唯一りんの青極む

滝音や思慕深ければささめきて

海鳴りを描き足す窓の星月夜

PDF= 俳誌の salon

神麓集

草の花　藤岡紫水

群れ咲くも競(きそ)ひなき彩藤袴
摘むほどに身ほとり翳る草の花
夜は川の汚れは見せず星祭
爪紅の弾け綾なす日の奢り
咲くままにこぼるるままに萩の宮

初時雨　沼田巴字

石庭は太古の匂ひ初時雨
極楽へ一直線の石蕗明り
秋深む死にゆくものの額に触れ
臨終はかくの如きか枯木立
小春日や未来は常に沖にあり

南無　丸井巴水

水母にも目的の二字隠し持つ
藁人形打つ啄木鳥の峪くらし
幾何学は不得意ながら浴衣柄
舌へ釘打ち込む寺宝盂蘭盆会
南無と彫る仏師の傍の氷水

今朝の秋　植村蘇星

心眼をもて左見右見今朝の秋
発奮の頬を叩きし今朝のあき
パンのみに生きるに非ず今朝の秋
風雲の迫る夕ざれ亀啼けり
自然の理風にはらりと桐一葉

PDF= 俳誌の salon

神麓集

炎天　北川孝子

アルバムに刻よみがへる夜のおぼろ
スキップの少女の来るよ鉾の町
コーラスの脚のびやかに鉾に向く
自分史にすこしの余白梅雨の果て
炎天人一歩ひとりの己が道

捩り花　直江裕子

日の遠く薩摩切子がやはらかい
カツト西瓜ふたりめの子が欲しかつた
捩花をふと見つけてしまつた私
このところ微熱がつづく百日紅
ひまはりといへば映画のソフイアローレン

はせを　高木晶子

目前で扉の閉る大雷雨
蚊遣香醒めぬ眠りへ誘はる
使ひ込む男歩巾の鉾梯子
梅雨の明け一枚剥がすメモ用紙
灼け石にはせをと読めて湖のそば

炎天　伊藤希眸

腿張れり草引く庭に日暮くる
旗しをれ鞍に人なき夏祭
遠雷を義父焼く音とかしこまり
喪主の声芙蓉開くをかたはらに
炎天のまぶたの重しビルの谷

PDF= 俳誌の salon

神麓集

偏屈王　木戸渥子

秘事ひとつ蔵し加齢や蓮の花
楽器五種すべてに頓挫火神鳴
台風予報二人の間のみそせんべい
あの方は社交家一面草いきれ
偏屈王の父への奥の手冷やし酒

遠雷　奥田筆子

遠雷や雲がくれせし単語帳
蓮の花口が硬いだなんて嘘
折鶴の軽さで生きてヒロシマ忌
草引きてうしろに増やす真つ昼間
夕立霧橋の向かうに師の待てる

瑠璃揚羽　井上菜摘子

仮縫ひのまま夕焼をたためない
あふむけに落蟬まなこ閉ぢてやる
力抜くことを覚えて瑠璃揚羽
それぞれの秘密へつかふ扇かな
はたちの抽出し雪渓の眩しさ

洛中図　村田あを衣

洛中図四隅にたまる梅雨の冷え
平安宮の名残りに拾ふ落し文
己が翳翔たすに迷ふ梅雨の蝶
不器用な返事金魚の泡ひとつ
雪渓や父の足跡重ね踏む

PDF= 俳誌の salon

京鹿子集

鈴鹿呂仁選

みなもとは星屑の降る三段滝
生きてきし証のやうに枇杷熟るる
弱点はとまと嫌ひやがき大将
蓮一片天使の羽毛かも知れぬ
流星の消えし辺りのヒュッテの灯
梅雨雲を手放すやうにシーツ干す
梅雨明けの雲の迷ひや認め印
病葉やドラマ後編につづく
かたつむり固定電話に辿り着く
自画自讃して夏蝶の風あそび

京田辺　山中志津子

京都　井尻　妙子

対岸は昨日の遠さ草いきれ
一切を糺の森の風涼し
また別の秋を付けたすマスタード
十六夜のベストセラーの動悸かな
終章の紆余曲折や穴まどひ
炎天の重さに白き傘たたむ
この橋にいつも風あり天の川
新秋の湖のあかるさ澪つくし
山うつす水の広さや今朝の秋
鳩吹く風夕日の沖にひと泳ぐ

城陽　鷺山　珀眉

京都　片山　熙子

PDF= 俳誌の salon

念仏をかきわけ法師鳴き出づる
青岬白馬たちまち風となる
空蝉のすがる力のまだありし
踏み外すきざはしひとつ終戦日
ひろしま忌声にならざるこゑあまた

福山　亀井　福恵

地図読めず取説読めず海月浮く
恋の歌流る晩夏のシャンソニエ
手の動きせはし棚経僧若し
羅の染みを落さむ身ぬちまで
雨蛙半眼で診る浮世かな
魂抜けて蝉の軽さよ腹の白
空蝉のひねもすのたり広葉かな
不審蚊の最上階のミステリー
守宮鳴くことは問ひとも応へとも
じゃんけんのぐうの重みや爆心地

京都　相模　温子

堺　寺岡　直美

福山　横溝　和恵

鮎よりも旨いと宿主(あるじ)岩魚焼く
伸縮もひと日のいのち尺蠖虫
北京の友夏葱甘し味噌ラーメン
夏渡米卒寿祝ひの折鶴と
遠花火去年の音も交じりをり
夏大根三世語る祖父のこと
ベランダの今年の花は小さき赤
犬つれて散歩する人夏の陽や
庭の芝みどり様様遠き空
空青く眺めはみどり今は凪
あの答へやはりあれでは夏座敷
にぎやかな声街通る夏の朝
蟬しぐれ午後のビル街占領す
三尺寝覚めて座禅やスクワット
梅雨冷は肩に一枚又一枚
八月は初盆迎へる三人に
胡瓜茄子届くばかりに感謝のみ
亡夫の飲み友達は盆待たず
池に鯉水面かすめる鬼やんま
鱧寿司や夢の父母割烹着
旅果てる庭の梅雨茸掃き取りて
夏の京路で地図観る異邦人

アリゾナ　伊吹　之博

オハイオ　水谷　直子

酒田　藤波　松山

渋川　東　秋茄子

さいたま　神田　惣介

PDF= 俳誌の salon